

対象の認識と造形

～造形美術Ⅱ「履き古したスニーカー —世界でただ一つの靴—」の指導から～

鉢呂 光恵

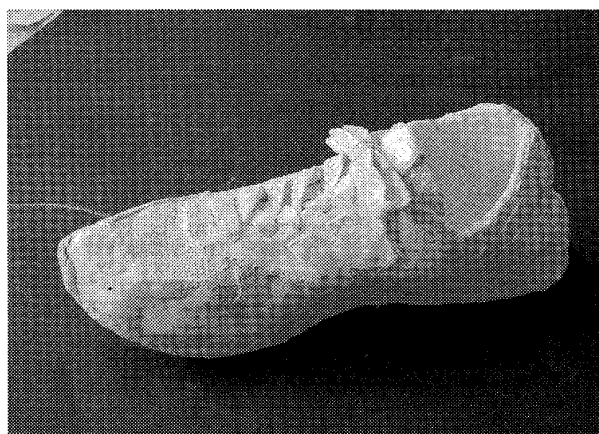
藤女子大学 人間生活学部 保育学科

1 はじめに

変化の激しい、価値観が多様化している今日、社会では創造性のある人材が求められている。保育者として、次代を担う子ども達を育てていく学生達に美術を通して創造することの素晴らしさを学ばせたい。創造とは、新しいものを自分の力で創り出すことである。創造には対象を豊かに感じ取る直感的な心の動き—感性—が重要な役割を果たす。

ところが、豊かな感性を持ち合わせながらも、表現の機会に恵まれなかったり、その個性的な表現が評価されなかったりしてきた学生が多い。美術が秘めている制作の楽しさ、素晴らしさを通して、生来持っている感性に気づくと同時に、表現の多様性や創造することの素晴らしさを感じてほしい。

また、本学保育科に入学以来、日々美術制作に真剣に取り組み、自己表現の素晴らしさを語り始めた学生達に、困難なことへの挑戦の場



【図1:学生作品】

—対象—をじっくり見つめ、じっくり制作に取り組む場を与えていきたい。こうした過程は、美的な経験をフィードバックさせながら、対象に対する認識を深化させ、感性に基づいた美的創造へと結びついていく。

造形美術Ⅱでは、紙粘土による立体制作を行う。「彫刻はロダンをもって始まる」とは、ハーバード・リードの言葉である。彼のいう彫刻芸術の独自性、即ち「空間を占める三次元的な量塊としての、その量感と、重量感に敏感な感覚によってのみ、理解される…」という言葉は、立体制作—彫刻—のもつ特性を見事に言い表している。立体制作のもつこの特性を教材価値として位置づけていく。

2 「造形美術Ⅱ」における学生の実態

今までに、必修教科である造形美術Ⅰでは、前期に表現と技法、後期に各種素材の使用による立体造形、平面制作を行ってきた。前期の制作では、描写によらない色彩と形だけの構成に、自由な表現が展開された。ほとんどの学生が新しく経験する美術の世界を「もうひとつの美術」と呼び、自らの個性を表現する喜びを味わっていた。後期では、様々な素材を用いて、平面だけでなく立体造形にも取り組み、描写技術を習得しながら表現の多様性にも目を向けていけるようになってきている。

こうした一連の取り組みを通して、「美術は自己表現」の意識を持つようになり、気負わず、自分の思いを生かしながら、制作に意欲的に取り組む姿が目立つようになってきている。個性的な作品も散

見される。

しかし、自己表出としての自由な表現は得意だが、ある対象を表現する力、つまり対象を豊かに感じ取りそれらを表現する力は十分とはいえない。見栄えのする作品も何かの模倣であったりすることが多い。「造形活動」は「認識活動」ともいわれるが、見ることと表現することが一体となって、対象に対する制作者の感性が作品として表現されたときに個性的な創造が見えてくるものである。造形にあたり、対象を認識する力をつけていかなければならないと考える。

3 造形美術Ⅱ「履き古したスニーカー ―世界でただ一つの靴―」の指導

(1) 素材（紙粘土）について

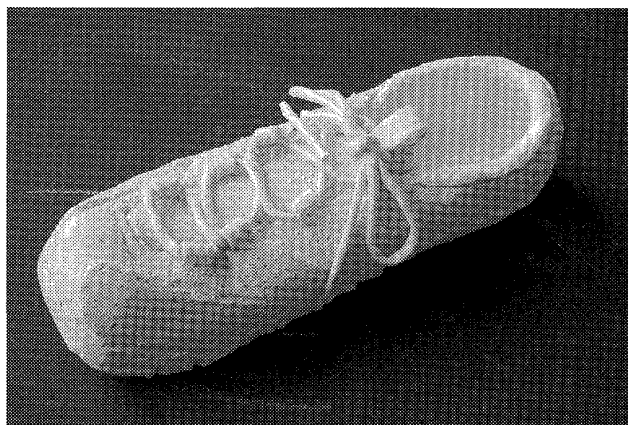
立体制作は、空間把握が難しい。スニーカーの観察から、試行錯誤しながらも対象へのイメージを深めていくことのできる素材として紙粘土を使用した。紙粘土は次のような特性をもつ。

- ・入手が簡単である。
- ・しっとりした感触やずっしりした重量感があり、彫刻制作の感触を味わうことができる。
- ・開封後、すぐに制作できるよう適当な柔らかさをもっている。
- ・扱いも容易であり、可塑性に富んでいるため何度もやり直しがきき、制作しながら自分の作品に対するイメージを創っていくことができる。
- ・継続して制作するための、長期保存が可能である。
- ・乾燥するともろく、壊れやすい。
- ・紙粘土固有の色彩である白は、彫刻のイメージを引き出し、表現しようとする意欲を生み出す。
- ・完成後の着色も可能であり、表現の発展性も期待できる。

(2) 指導の想定

① 立体制作の可能性

学生達は、昨年の「造形美術Ⅰ」で、自分の靴をデッサンした経験を持つ。ほとんどの者が、靴の複雑な形を確かなフォルムで描写することができてはいたが、今回の様な複雑な立体制作については経験がないものと思われた。自分の手で自分が履いていた靴を立体制作していくことは、かなりの困難が予想される。しかし、造形に対する意欲と対象への認識を深める上で大きな教材価値があると考えた。



【図2：学生作品】

描写・再現絵画では3次元の物体を2次元の平面上に再現しなければならない。そのため、描写技術の習得がなされていなければ、意欲があっても表現がスムーズにいかないことが多い。例えば、平面作品に立体感をつけていくためには、光と影（明暗）の表現法、遠近法、質感表現法等、デッサンと彩色の両方を含めた技術の習得が必要である。

その点において、立体制作は、絵画等の平面制作に比べると、より直接的な描写、再現の制作が可能である。空間把握の難しさという課題は存在するが、反面、表現が直接的であり、立体を平面に置き換えるという技術の習得がなくても制作が可能である。

② 対象を見直す立体制作

造形美術Ⅱ「履き古したスニーカー ―世界でただ一つの靴―」では立体制作として、三次元の彫刻に取り組ませる。履き古した靴に対する思いは、本人だけが知っている強い思いであり、形のくずれや汚れにも自分の靴であるがゆえの愛着をもっているものである。彫刻は視覚を通して感じ取られるだけでなく、触覚を通して確かめられるものでありその思いを作品として表出していく。また、靴は心棒（骨組み）の構造が難しくないこと、形態（フォルム）の美しさがあることの点で魅力的なオブジェとして形成されることが期待される。愛着のある自分の靴ということで、制作者により小さな意欲を起こさせる。しかし、対象は立体であり、形の把握は容易ではない。制作への見通しが持てない者も数多くいるはずである。複雑な形等、困難な要素をかかえた対象だからである。

したがって、必然的に対象をじっくり観察する必要性が生まれてくる。平面的に見るだけでは、見通しをもつことができないことに気づく。まず、手を動かしながら、対象のもつ全体像を把握しようとする。対象のもつ、硬さ、やわらかさ、なめらかさといった質感、量感等々、視覚、触角両方の感覚を総動員して取り組むことになる。感覚を通してとらえた対象の具体像は制作へのイメージに結びついていく。自分の靴の全体像を忠実に再現してみたいという意欲が生まれてくる。

しかし、複雑な要素をもつ対象―靴―はスムーズな形象化を拒む。試行錯誤、やり直しといった苦しい制作が待ち受けている。何度も対象を見つめ、素材のもつ質感、量感を、目で、手で確かめながらの制作が続く。その過程で、自分だけが感じ取った表現を発見してくる。自分の表現にこだわりを持つようになるのである。自分の靴に対する自分だけの表現である。この様に目や手を駆使し、困難な過程を経て制作した形象化された作品は、「世界でただ一つの靴」である。すみからすみまで知り尽くした「自分の靴」である。苦労が多いだけに達成感と満足感、自信は大きなものになる。この制作は造形力を育てることのできる示唆を含んだ内容をもっているといえる。

このような制作の経験は、他の作品に対する理解を生む。描写・再現彫刻であるが、細部の一つ一つに自分ならではの工夫の跡が残されている。対象に対する自分なりの見方が形成されているのである。この見方は他の作品へのするどい見方へと結びつく。鑑賞の目が育つのである。

③ 保育者として

幼稚園教育要領のねらいの「表現」には「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」とある。自分の「履き古したスニーカー ―世界でただ一つの靴―」の立体制作は、様々な感覚体験、困難体験を味わうことになる。そこで得られる心理的、生理的充実感、達成感、単に制作の、満足感にとどまらず人間形成の糧になっていくものである。保育者を目指す学生にとって、未来を築いていく子ども達が創造的に、個性伸長を図りながら、情操豊かに育っていくためには、子ども達の表現をしっかり受け止める創造性あふれる人間性が求められる。保育者を目指す者として、対象に対する認識と同時に造形に対する認識を一層深めていくものになると考える。

4 指導の実際

(1) 制作への準備（制作道具の準備）

- ・「粘土べら」を制作した。市販の割り箸を使用し、カッターで先端部を斜めに削る。自分で工夫して作成した手作りの粘土べらは、市販されているものと比べても使い勝手がよく満足のいくものになった。この粘土べらは形成の他にも、布の質感を表すときや、穴をあけるときの用具として使用した。
- ・彫刻は全方位からの制作が必要なために、モデル台の代わりとして事務用のクリアファイルを使

用した。回転が自在で使い勝手が良好であった。

- ・制作中の作品の保管には、濡れタオルとビニール袋を使用した。
- ・布、縫い目等の質感を表現するために、針金や爪楊枝等、身近にある用具を使用した。身近にあるものを用具として見直す機会にもなった。

(2) 制 作

① モデルの設定

自分のスニーカーを用意させる。愛用していた頃の自分の生活を思い起こさせながら、形、汚れ、皺の一本一本を詳しく観察させる。できるだけそのままの靴の姿を紙粘土で再現していくことを目標として投げかける。

「匂いも懐かしい」などと、靴に対するそれぞれの思い出がつぶやきとなって出てくる。

② 紙粘土の提示

紙粘土を提示する。紙粘土の特性及び留意事項について説明する。

- ・すでに適当な柔らかさ（耳たぶぐらいの柔らかさ）に練られているので、改めて練る必要のないこと。一度使用した場合は、水分を補給して適当な硬さを保つようにすること。
- ・製作中は、手の体温によって水分が蒸発するので、傍らに濡れタオルをかけたり水分を補給したりしながら常に扱いやすい柔らかさを保っておくこと。

などである。

紙粘土に触れたとたん、「ワーッ！」と歓声があがる。自分の靴を直接作っていきたいという制作への意欲が見られた。

③ 制 作

まず、制作過程の説明をする。

- ・画用紙で靴の底の形をとる。
- ・底の部分と甲の部分に針金の芯を入れる。
- ・底を取り囲むように、靴の側面と甲の部分を「手びねり」の要領でひも状にした粘土を手で押しながら積み上げていく。

などである。

制作の留意点として「彫刻は立体造形なので、前後左右上下などあらゆる方向から観察して制作する必要がある。モデルと制作中の靴の両方を回しながら、多方面から制作する」ことを告げる。

制作の難関は、靴の形（フォルム）が決まるまでであった。この時期は、次のような制作の様子が見られた。

- ・つま先部分は表面から見えないところなので、厚く「ひねり出し」技法のように、引っ張りながら形成している。針金の心棒が入っているので形成しやすく、靴の大まかな形をつくるのに苦労している様子が見られた。
- ・スニーカーなので、編みあげ状になっている紐下のペロの部分は形が不安定であり、特に苦労していた。

などである。

靴のフォルムの形成には、全制作時間の3分の2（6～8時間）を費やした。彫刻という立体把握の難しさを実感させられたのである。細部の形や、表面の凹凸に目を奪われ、彫刻の大きな塊として全体像をとらえることがなかなかできなかった。また、細部にとらわれていると、いつの間にか作品が大きくなってしまい、收拾がつかなくなってしまう姿も見られた。全員が必然的に空間、量（マッス）、動勢（ムーブメント）という彫刻の基本を考えなければならない事態に直面したのである。世界で

ただひとつの自分の靴を完成させるためには、彫刻の基本に挑戦せざるを得ない状況に陥ったのである。再度、モデルと作品の両方を回しながら、あらゆる角度から見ていくこと。細部にとらわれずに大きな塊として全体を見ていくこと。できるだけ直線的に形成することなどの助言をする。

全体のフォルムを形成しながら、靴の土台となる部分を整えると、靴を覆う布の部分の形成は、試行錯誤の状態ではあったが、比較的楽に感じられるようになってくる。

ここまで進むと、後の制作は順調だった。一番困難と思われた靴紐の交差の部分も、今までの取り組みで会得した技術が生かされてきているのであろうか。形成の大きな流れに沿って、ゆったりとした気持ちで、最後の仕上げを楽しむことが出来た。

作品として仕上がった紙粘土の白は、独特の素材感があり彫刻の美しさを表出している。そのまま、完成作品とすることもできるが、保存強度を増すために、紙粘土が完全に濡れてから水性ニスで2回塗布した。

制作の途中、作品保管のミスから作品が著しく破損するという事態が発生した。思いもよらない事故ではあったが、壊れたときの再生法を習得する機会ともなった。

④ 制作を終えて

制作の過程では、形成の前段階（フォルムの形成まで）に多くの時間を費やした。完成の見通しがもてないまま、放課後残って制作する学生もいた。しかし、自分の「世界でただ一つの靴」を作るという意志が、最後まで完成させるという意欲に結びついたようにも思う。また、適度な困難性が完成への見通しがもてたときに新たな意欲にもなっていた。1、2の指導・助言を行ってはいいるが、ほとんどの学生が自力でフォルムを形成していった。自ら潜在的な造形力を引き出していたようにも思う。

完成されたひとつひとつの作品には、制作者個人の対象からとらえた感性が色濃く反映され、個性的な作品に仕上がっていた。

対象を長時間に渡って見つめる制作の間に、内がわから湧いてくるような動きや、生命感を感じとっていたように思う。彫刻としての空間、量（マッサ）、動勢（ムーブメント）が構成され、作品としての存在感があった。

⑤ インスタレーション（設置）としての発表

学生の努力が実り、彫刻としての存在感のある個性的な作品を完成することが出来た。そのことによって立体造形の発表方法を指導する機会が訪れた。

制作終了後、現代アートのインスタレーションのように発表を行った。

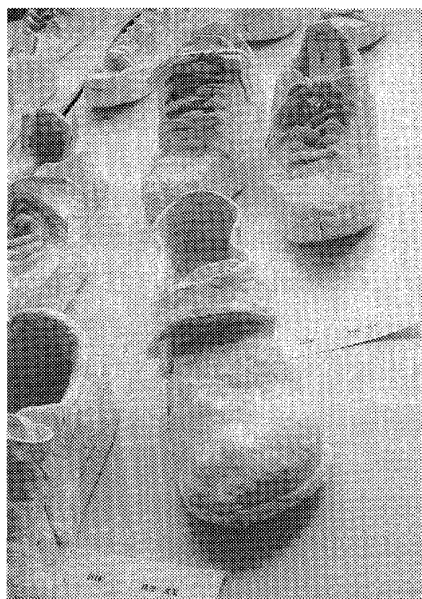
～「インスタレーション」について～

インスタレーションという用語が美術用語として用いられ始めたのは、70年代後半になってからである。最初は画廊や美術館など特定の空間に作品が設置された状況そのもののことを指していたが、彫刻などの物体を構成した作品とする見方から、その後、設置された空間全体を作品とする見方にかわってきた。これが80年代に入って、新しい表現方法のように用いられ始めた。すでに「現代用語の基礎知識」、「イミダス」などの辞典にもこの言葉が出てきており、今では単なる美術の専門用語から、より広範囲に使われるようになり、社会的に一般化している。

—川俣正 著「Artless-マイノリティとしての現代美術2001」フィルム・アート社—

空き教室を会場とし、1週間ごとに設置の方法を変えて、都合4回のインスタレーションを行った。第1回目は、白い机上に、前方向に向けて制作した靴を無作為に並べたインスタレーションである。シンプルに設置された会場では、一足一足の靴が、空間、量感（マッサ）、動勢（ムーブメント）を備え

た彫刻として位置づいていた。発表時、彫刻は空間に存在するのでどの方向からも鑑賞することが出来るが、特に靴は見る方向によって印象が異なることなどの、彫刻の見方について話し合った。作品は、前から見ると靴の集団が迫ってくるような威圧感があり、反対に後ろ側から見ると去り行く人を見送るような寂寥感を感じ取るなどの感想があった。



第2回目は。会場内に設置した「靴箱」を発表の場とした。作品を靴箱の中に設置し、それぞれの作品の靴に制作者の名札をつけた。靴箱という日常使用されている場における作品ということで、設置の意外性が強調され、現代アートのインスタレーションというイメージが鮮明になった。並べられた作品の、39点のそれぞれが、あるべき靴箱の中で、「日常の中の非日常的な存在」を主張していた。ライティング（光のあて方の変化）によっても作品の見え方が変化していった。

作品に見入る制作者の学生たちは、意外性のある設置に、驚きの声をあげていた。その姿は、彫刻アーティストとして満足と自信に満ちていたように思う。制作への長時間の取組みがあったこと。困難を乗り越えてきたこと。立体制作を通して、技能のみならず立体に対する認識を深めることができたこと、等々が結びついていた。

【図3：インスタレーション1】 第3回目は、前回までの「静」のイメージから一転して、「動」のイメージを意識したインスタレーションを行った。今回は、学生達も自ら設置に参加した。①床に直接置くこと、②会場内の対角線を意識して置くこと、③3色（青、黄色、オレンジ）のカラーペーパーの中から好きな色を選んで靴の中に入れること、という条件で自由に設置を試みさせた。白という無彩色の靴の中に、カラフルな有彩色が存在してくると、前回までの「静」のインスタレーションのイメージが一変し、躍動感のある空間が出現した。しかし、自分の作品に対する愛着を抱いて鑑賞している学生からは、「色彩が入ると、靴の一足一足が持っている個性が消えてしまった。全体としての靴のイメージが強くなった。」という意見も聞かれた。

第4回目のインスタレーションは、会場内の壁と床に暗幕を張り巡らした。黒い背景の中で、黒い床に、1列目は右から左、2列目は左から右というように白い靴の行列を繰り返し、方向性の感じられる設置をした。先週と違った、白と黒という抑制された色彩のバランスの美と相まって、人間の歩み、人生を感じるという意見もあった。

以上、いくつかのインスタレーションの試みから、設置の方法によって作品の持ち味が変わって見えること、作品の存在する空間自体も重要な要素であることなどに気づいていた。



【図4：インスタレーション2】

⑥ 学生の感想

制作を終えた学生からは、達成感、忍耐力、観察力、集中力、自信等々制作を通して自己発見した喜びのような感想が多かった。一部を紹介する。

・ひとつのものを最後までじっくり制作するのは素晴らしいことだと感じた。

- ・難しい制作を通して、難しいことを継続する力、創造の喜びを味わった。
- ・はじめは絶対無理だと思った。相当の集中力が必要だったが、自分も集中して頑張れば難しそうだったこともできるものだということがわかった。
- ・見たものをそのまま表現することは難しいが、見たとおりのものが出来上がることも喜びである。
- ・普段何気なく見ているものに目をやることで、存在している美に気づいた。
- ・ものをじっくり観察すると気づかないようなことも見えてくる。
- ・丁寧にしないと形となって（結果となって）表れてくる。
- ・成せばなる。最後まで完成させて本当に嬉しい。
- ・紙粘土に触ることのできる制作自体が楽しかった。
- ・自分にはできないと思っていたが、制作の方法を教えてもらうことによりリアルな靴ができあがった。達成感があつた。
- ・制作ごとに苦手意識がなくなっていった。集中してできた。
- ・自分の形が出来ていくところが凄い。
- ・途中で辞めたくなくなったが、そこを乗りきったら、満足できる作品に変っていった楽しかった。思い通りできない苦しさを初めて味わったと思う。できあがって満足している。
- ・ぶっさいくな靴ができあがったが、自分の靴がいちばん可愛い。
- ・生命力が宿るほんまものの彫刻が作成されてびっくりしたなもう。
- ・インスタレーションという言葉を知った。並べ方によって作品の雰囲気や見方が変ることに驚いた。



【図5：インスタレーション3】

5 考 察

絵画は、完成の瞬間を自分で決定しなければならないが、彫刻の制作は、完成までのプロセスが明確であり、完成の瞬間もはっきりと自覚することができる。達成感を実感できるのである。今回は制作の前段階において、完成の見通しがもてないという手探りの状態で進めてきた立体制作であったが、自分の靴を見た通りそのままに再現していくという到達点は明確に持つことが出来た。完成に向かうプロセスは誰もが押えていたと言える。ただ、最後まで意欲的に制作を続けることができるか否かが重要な鍵になった。次のことが制作に向かう意欲になっていったと思われる。

- ・「世界でただ一つの靴」—自分の靴—をつくることが作り上げる意欲になった。
- ・立体制作という空間把握の適度な困難性が、制作に向かう意欲と完成時の達成感につながった。
- ・制作が困難な壁にぶつかったとき、彫刻の基本を自ら習得せざるを得ない状況に陥った。自分の靴を何とか完成させたいという思いが、周りから情報を集めたり、自らの潜在的な造形力をフル稼働させたりと試行錯誤しながら、ひとつひとつの困難を乗り越えていく原動力になった。
- ・靴という同じ物の再現でありながら、自分の履き古した靴の制作だったので、どの作品も個性的なものとなった。

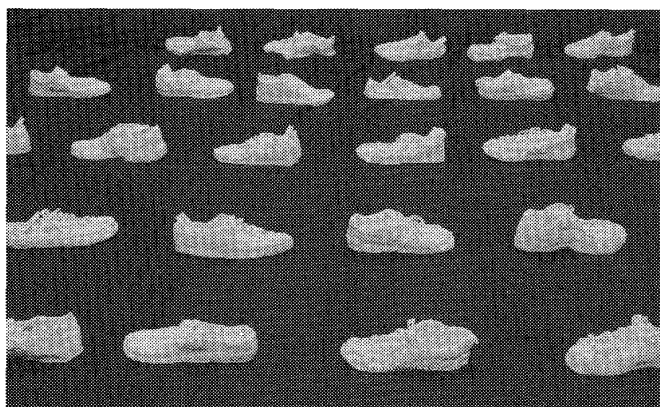
現代美術を意識したインスタレーション（設置）では、それぞれの作品のもつ存在感が、空間内に

おける設置の方法によって変化することを確認することが出来た。また、インスタレーションの空間全体をひとつの作品としても意識することが出来た。これは、

- ・「世界でただ一つの履き古した靴」という課題設定が、自分の生活の中で愛着をもって接した靴を何とか完成させたいという思いになり、自分しかわからない個性的な作品として完成されていた。
- ・第2回目の場合は、空間内に「靴箱」を設置したことで、美術を日常に位置づけするという効果をもたらした。日常における「白い靴のある靴箱の風景」という非日常が、強いインパクトを持つものになった。

白い紙粘土を用いた自分の靴づくりは、素材の特性から学生の個性的な表現を引き出すものになった。それは、

- ・白い靴は出来上がりの美が保障されている。しかし、個々の表現の工夫によって当初の予想を越えるほどの、生命感に溢れた個性的な作品が制作された。
 - ・立体制作は難しい課題であったが、何回でもやり直しがきき、意欲を持って制作に励むことで、目標としていた作品を完成することが出来た。これが「やればできる」という自己発見、自己確認につながった。
- 学生からは、様々な感想が寄せられた。



【図6：インスタレーション4】

いずれも、制作を通しての自己発見及び仲間の良いところの発見につながるものであったように思う。それは、

- ・制作を通して、困難を乗り越えやり遂げたという確かな手応えを感じたこと。
 - ・対象を詳しく観察することが対象を理解し、作品のイメージにつながっていくこと。
 - ・難しいことに挑戦することが、自己の創造性を引き出すこと。
 - ・対象の理解は観察だけではなく、五感を働かせて全体像が認識されていくこと。
 - ・そうした五感を働かせてじっくり取り組む制作が、自己の感性を引き出していくこと。
 - ・適度な困難のある制作は、完成時に達成感を味わうことができること。
 - ・作品制作の苦労と工夫は、対象に対する認識の深まりを必然的に引き起こしていったこと。
 - ・制作を通しての自己発見は、他の作品への理解にもつながったこと。
 - ・普段何気なく見ている、接しているものに対して、じっくり見ることが意外な創造に結びつくことを実感させることができたこと。
 - ・インスタレーションにおいても、集団の中での自作品の存在を的確に捉えることが出来たこと。
- などである。

美術における認識は、感覚によって触発された感性と表現の一体化によって図られる。今、美術教育において、表現と鑑賞が問題になっている。「表現」が見るものと切り離せない知的活動であるということである。ところが、日本の美術教育は「表現」に偏りがちで、「鑑賞」－見る力－が欠けているといわれている。表現のために身のまわりの美術文化や形、色彩の世界からイメージを高め、蓄積していくといった「鑑賞」が十分でないという指摘である。

今回の立体制作で、スニーカーという対象に対し感覚を総動員してとらえ形象化していく過程から、対象への認識を白い紙粘土でつくられた「世界でただ一つの靴」という個性的に表現された作品で結晶化させた。自分の靴の表現を通して、対象を見つめる目と同時に、造形を対象として感じる目－「鑑

賞の目」一を持つことができたように思う。

「靴」制作終了後、造形美術Ⅱでは後期のカリキュラムとして、‘絵本制作’に取り掛かっている。ここでは学生たちから、「漫画のような絵ではない、自分らしい表現を工夫した絵本を作りたい」という意見や要望が数多く寄せられている。自分の見方が出来てきたこと、他の作品がわかるようになってきたことで、表現へのこだわりが強く打ち出されるようになったと思われる。

「創造」は対象を自己の感性をもって表現していく絶え間ない追求であるが、それと同時に、文化遺産、他者の表現に対する鑑賞力の重要な要素になっていく。

立体制作を通して会得した ‘対象の認識と造形’ の成果が、今後の制作や認識とどうかかわっていくかを期待して見つめていきたいものである。